注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
東方偽人録～ｔｈｅ　ｆａｌｓｅ　ｈｕｍａｎ～

【作者名】
あんのーん

【あらすじ】
『偽人』という妖怪の青年は人殺しと言われた幼き頃に八雲　紫に拾われた。彼女のもとで雇われた彼は謎に包まれた人里の裏へと足を踏み入れていく。
そこで彼が見たものとは？彼にとっての正義とは？
原作ではあまり語られていない人里で起きていた異変を一つ。

文章力の低いｐ主の誤字脱字多め、さらにオリジナル度の高い作品となっております、ご注意下さい。
それでも見ていただけるならゆっくりでもゆっくりでなくても見ていって下さい。

プロローグ

「人殺しの化け物め。」

そんなこと言われたのは小学三年生の時。

当時いじめっ子だったクラスメイトに腹を立てた私は彼を教室のど真ん中で思いっきり殴ってしまった。今思えば物凄いパンチで彼は何メートル飛んだのだろうか、その飛ばされた勢いは弱まることを知らず、掃除用具入れのロッカーに彼を叩きつけた。彼は頭を打って気を失い、意識は戻ったがその後、頭を強く打ったことで起きた脳挫傷が原因の脳内出血で亡くなった。

翌朝、当然の事ながら担任に呼ばれて行った会議室で同様に呼び出された相手の親御さんが怒り狂ってそう言ったのだ。

散々に言われた帰り道。

赤ちゃんポストに入れられていた捨て子の私は当時孤児院で暮らしていた。しかしその孤児院は孤児を奴隷のように扱う地獄のような場所だった。人殺しをしたと言うことが伝わっていると考えると帰ればただではすまされない、そう思った時にはすでに孤児院とは逆方向へと歩みを進めていた。日も傾き、人通りの殆どない裏路地を暫く歩いていると見知らぬ女性に声をかけられた。

彼女は自身を『八雲　紫』と名乗り、彼女の話によると彼女についていけば『幻想郷』と言う楽園へ行けるとのことだった。この世界には居場所は無いと悟った当時の僕は迷わず彼女についていったのだ。

今思えばそんな胡散臭い話に乗ってついていくわけがないと突っ込みたくなる所である。だがしかし極限状態であったのもあるがそれ以上に私はその女性の言葉が嘘には思えなかったのだ。

彼女のあとをついていく途中、色々なことを教えられた。まず彼女は境界を操る妖怪で自分の能力で作ったスキマからずっと私の家族を監視していること。その理由は私の両親が人間の男と妖怪の女であり、母親が『偽人』という謎の多い妖怪であったのからだ。しかし事件は起こった、母は私を産んだ後少しして原因不明の死を遂げた、その後父は私を赤ちゃんポストに入れ失踪。翌年、とある山の山中に放棄された車の中で遺体で発見された。硫化水素自殺だそうだ。錯乱状態に陥り、狂いに狂ってしまい死んでいった母を見てうつ病になっていたらしく、私が数日間過ごした家には精神安定剤があった。そして父は実は孤児であったらしく、事実上私は天涯孤独であることを知らされた。それから彼女は監視対象であった母を突然失い、ポストに入れられた私を探しだし監視対象とした、そして今回の件で私が『偽人』に覚醒したと判断、私を幻想郷に無理やりにでも移すことを決めたことを話された。『偽人』とは彼女の調べによれば他の種族の妖怪の血を得ることにより特性や能力をトレースする妖怪であるらしい。個体数が少なく、人と形がそっくりで魔力や妖力を限りなく0に近づけることもできる為、人と区別がつかないらしい。その変わり、何か特別な条件が揃うと原因不明の死を遂げる、どこまでも謎の妖怪だ。

しかし私はハーフであるため原因不明の死を遂げる確率は低いことを知らされた。

幻想郷についた私は自立した『偽人』となるため、八雲　紫の式である八雲　藍の指導のもと私は八雲家で過ごすことになったのである。

八雲家で暮らし始めて早数年の月日が流れたある朝。

「おはようございます！起きてください！」

時間は午前6時。

「…橙……か？」

「はい！おはようございます！」

バッと南側の襖を開けられた、朝焼けの太陽が刺すように私の顔を

照らす。これは起きるほかにない。

１８歳となった私は『偽人』としての能力をようやく手に入れ、今日、一人で生活することを決めたのだ。いつまでも管理されるような年齢ではないが、幸先は悪い気がする。

「今日から一人暮らしだというのに…貴方は自覚が足りません！」

自分より明らかに幼そうな女の子に言われると正直へこむ。しかし正論であるゆえに「すいません」とただ謝るしかない。

「紫しゃまが呼んでます、早く着替えて行ってください。」

呼ばれていると言われた私は全速力で着替えて、顔を洗い、歯を磨いた。そして万全の状態で紫の前へと姿を見せた。

「おはよう、そこに座りなさい。…それにしてもこうしてみると偽人も成長が早いのねスキマの中で過ごした数年間はどうだった？」

目の前にいるのは大妖怪、八雲　紫少なくとも私が分かる範囲ではこの女性こそが幻想郷の創設に関わった重要人物であり、この隔離された幻想郷という世界の境界、及び結界を管理している。

「まぁ、今日であなたを外に出すわけだけれども、一つあなたに頼みたい事があるわ。」

そんな大物にあらたまって言われたその一言に正直驚いた。

「あなた程の妖怪が俺みたいな中途半端な妖怪に頼み事なんて。」

私は驚きを隠せぬまま言葉を返した。

「あなたのこれからの生活拠点をとある人里に用意したわ。実はその人里で調べて欲しいことがあるのよ、あなたの能力が必要なのよ。ただとは言わないわ、もしかしたら危険な目に遭わせるかも知れないもの。勿論受けてくれなくても構わないし生活拠点はあなたが断ればちゃんとした物を平穏な場所に用意するわ。」

私は八雲家に小三の時からの恩がある。そんな恩人の頼みを断る

わけがないし断れる筈もない。私は快くその頼みを受けることにした。

「それでその調べて欲しいことって何ですか?」

聞かないことには始まらないこの話題を切り出した時、紫は普通は受ける前に聞くものと言わんばかりの表情を浮かべながら、「その人里の長について探りをいれてほしいの。」と言った。

第一話『偽人が見た人里』

人里に到着した私は自分の活動拠点となる家の場所を探し始めた。
人里は結構広く、活気に溢れていた。何故八雲　紫はこんなことを頼んだのだろうか、この里は人もたくさんいて商店街は賑わい、家族づれが笑顔を絶やさずに歩いている。今までの自分にはなかった世界がそこにはあり、嫉妬してしまいそうな位に平和だった。

里の長に探りを入れるのが紫の指示だが、この里の様子を見る限り、この里の長は神並みの善人だろうと思ってしまう。少なくとも悪人のはずがない。
もしかしたら紫は平和や暖かさをあまり感じたことのない私へ褒美をくれたのではないだろうか。そんなことまで思い始めたころ、私がこれから寝泊まりをするになる活動拠点となる一軒の家をを見つけ出した。
中はきれいなで新品の畳の香りがする六畳間があり、襖を開ければ寝室になるであろう四畳半の部屋があった。流し台やら生活に必要な設備はしっかりとしていた。食材は月二回、八雲家から届くらしい。紫曰く「依頼を受けてくれた補助」だそうだ。

荷物を六畳間に置き、依頼内容である里の長に直接会いに行こうと部屋の外に出ようとした瞬間、一人の男が私の家を訪ねてきた。

「はじめまして、あなたが新しい里の住民ですね。」
その男は三十代ぐらいの男で、突然のことに唖然としている私に対し続けてこう言った。
「私がこの里の長、片岡と申します。」

監視対象が自分から来たのだ、これには驚くしかない。八雲家で写真を見たので本人であることに間違いはない。しかし普通新しい住

民にわざわざ挨拶に来るだろうか。信用を勝ち得るには手っ取り早い手段かもしれないが。
「あ、わざわざありがとうございます。私は神田…」
「神田　颯さん、ですよね？」

名前まで知られている。住民表の様なものに名前を記入した覚えもない、紫が先に言っていたのだろうか。
さらに片岡と名乗る長は話を続ける。
「住民一人一人が一致団結して里を活発にしていくのがこの里のモットーであり、住民の声でこの里は大きくなっていきます。古い無駄なしきたりを無くし、新しい物をこの里で生きる全ての人と手を取り合って創造していきます。今日からあなたもその一員です、要望は里の中心部にある相談所で受け付けておりますので何かありましたら言ってみて下さい。可能な事項であれば長である私が責任を持って実行いたします。それと里の規律ですが…」
彼の説明は少し長く続いたが、里全体が活気に溢れていた理由が少しわかった気がした。この長は里の住民を第一に考えて、活動している。自分は長という立場を自覚した上で、独裁等をせず、まずは里がいい方向に進むことを考えている、教養もありそうでかなりの常識人だ。しかしその次に彼が語った里の規律が紫がこの依頼を頼んだわけを嫌でも理解することになった。

紫は幻想郷のことを全てを受け入れる最後の楽園と言っていた。
忘れ去られた者の救済処置としての役割を果たしており、魑魅魍魎が渦巻いている。よって人間と妖怪は共存しなければならない、だがしかし彼の放った一言はそれを覆したのだ。
「最後に大事なことを。妖怪に関わった者は人として見ず、即刻里から出ていっていただきます。妖怪なんてあんな汚らわしい化け物に里の地を踏ませない為であり、触れられた者も触れた者も汚れてしまうので同様に出ていっていただきます。最初に来た方は厳しいのではとおっしゃりますが、慣れればどうってことはありません。誰も何

もいいませんよ。」
彼は幻想郷の暗黙の了解を無視していた。
しかし住民が同意しているのもおかしい、そんなことがあっていいはずがない。第一にに人間として見ないとはどういうことだ？襲われるのは悪くないだろう。
そんな思考が頭を高速でめぐった。

「それではまた、長らく話してしまって申し訳ない。何処かでお会いしましたら。」
そういって困惑した表情の私を横目に彼は去っていった。
この里はどうなっているんだろうか、まずは自分が妖怪であることは気付いていない様だ。
妖怪に恨みでもあるのだろうか、酷く彼は妖怪を嫌悪していた。まるでゴキブリか何かを嫌うような、いやそれ以上だ。
その時「危険な目に遭うかもしれない」という紫の言葉が再度頭をよぎった。家には入って来なかったが片岡の後ろにはガードマンのような筋肉質な男達がおり。その権力はかなりのものであるのは容易に想像できた。さらにガードマンは幻想郷にないはずのショットガンを所持していた。この事から片岡という男の背後には科学や金属加工と言った技術力がある。
これはかなり大変な依頼を受けたことを実感した。恐らく一人でやり、ミスをしようものならば私は確実に死ぬ。

暫くしてようやく頭の整理がついた私は商店街に出てみることにした。時間はだいたい17時頃、商店街は行灯の火や古びた白熱灯の明かりで優しく包まれていた。電気は最近になって片岡が作ったらしい、導入には時間がかかるらしいと肉屋の商人が言っていた。
妖怪についても聞いてみたが皆口を揃えて嫌悪の言葉を述べ、場合によっては「そんな話をするな。お前まさか妖怪の仲間か？」等と言われる始末であり、正直吐き気がするぐらい気持ちが悪かった。
私の心は明るく活気の溢れる商店街とは真逆で不安や疑い、困惑等

でいっぱいになっていた。そのまま私は何も買うこともせず、ふらふらとさ迷う様に商店街を歩いた。

日も落ち始めた１８時。無意識の内に私は商店街を抜けており、元の道を戻ろうとしたとき、ふと一軒の木造の建物に目が止まった。どうやら学校のようだ。中から一人の女性が出てきた。見慣れない帽子の様なものを被っており、髪は長く青みがかっていた。彼女は私に気づくと歩みよってきてこう言った。

「見ない顔だな、新しい住民か？」
「え？あ、はい。」
「私は上白沢　慧音と言って、そこの寺子屋で教師をしている。突然話しかけてすまないが、片岡という男に会ったか？」
「はい、この里の長を務めている方ですよね？」
「なるほど、ちょっと中に入るんだ。話がある。」
そういって彼女は私を半ば強引に寺子屋の建物の中へと引きずりこんだのだった。

寺子屋の入り口から入った玄関でたまらず質問した。
「な、何ですか？」
「その様子ならまだ洗脳は受けてないようだな。」

洗脳という聞きなれない単語が出てきて私は少し戸惑った。何を考えたのか彼女は続けてこう言った。
「初対面で無理やり連れてきたことは詫びよう。名前を聞いていなかった、君の名前は？」
「神田　颯です。」
「颯だな、わかった。なら颯、お茶と酒、どっちがいい？」

私は迷わずお茶を選んだ。すると彼女は私を教室と思われる大き

な部屋に通し、暫くして彼女はお茶とお茶菓子を持って現れた。
「改めてはじめまして、私は上白沢　慧音、教師だ。さっき洗脳がどうたらこうたら話したのに反応していたようだがそれに関しての話をしよう。その前に、君は何の妖怪かわからないが妖怪だろう？」

ばれてしまった、しかも会って数秒の相手にだ。

「仕事柄見分けるのは得意でね、そうとう擬態が得意みたいだが魔力が人間と違う。私も白沢という妖怪だ、しかし満月のときしか私は返信しない、だから妖怪でもばれていないんだ。」

お茶を飲み、一息ついた彼女は話を続けた。

「さて、本題に入ろう。奴の目的はわからんが、さっきの様に道行く人に片岡と呼び捨てで呼ぶと思いっきりキレられて自衛官を呼ばれてしまう。気を付けるんだぞ？」
自衛官、この里の警察のようなものと聞いていたが実際は片岡の元で手足となって働く下僕のようなものらしい。
彼らが片岡を敬称で呼ばない者を連れていき、何やら洗脳のようなことをして解放しているらしい。
「私も一度連れていかれそうになったが誰もいなくなったところで能力を使って抜け出してきた。」
彼女には『歴史を食べる程度の能力』があり、小規模だが自分の捕まったという歴史を食し、なかったことにしたらしい。

「片岡は危険だ、一度奴のいたという歴史を改竄してみたが数日後には元通りになっていた。奴も何らかの能力を持ち合わせているのだろう。ところで話は変わるが颯は何の妖怪でどんな能力を持っているんだ？」
「種族は『偽人』で『あらゆる種族の特性を真似る程度の能力』を持っ

ています。」
「ほぉ、珍しい。『偽人』か、なるほどな。道理であの片岡の目を誤魔化せたわけだな。」
そう言うと彼女は笑った。
「颯はおかしいと思わないか？奴の言っている妖怪への卑劣な対応は。人間には特権があるとはいうのにこれはやりすぎだ。」

ここで彼女の言った特権とは、人間は非力であるが故に妖怪に襲われてはひとたまりもない。幻想郷にいる数少ない人喰い妖怪は指定された人間のみ食べることを許されている。人間はもし妖怪に理由もなく、更に人間側に非がない状態で襲われた際にその妖怪を地獄へ送る権利がある。等、妖怪と人間が共存するための基準として設けられた特権である。

「これまでに何度か腹を立てた妖怪が片岡を襲おうとしたが、明らかに片岡に非があっても皆地獄に落とされてしまったよ。」
「それも能力の恩恵？」
「そうとしか思えん、そこでまだ洗脳を受けていない住民を集めて会議をしたり夜中にこっそり外の妖怪と話をしたりしながら片岡の裏を探ろうとしているんだ。颯の力も貸してほしい、偽人は珍し過ぎて奴も知らない筈だ。」

この話は私にとっても好都合だった、この里にも仲間がいるのだ。数は少なくとも情報通な人が多そうである上に、彼女は教師で能力も優秀である。
話に聞けばこの里を元々妖怪から守っていたのは彼女であり、里の住民からの信頼も例え洗脳されていても衰えないし、当の片岡も気付いていない。寺子屋の存続に関する問題があるので公の場で動くことはできないにしろ彼女はかなり大きい後ろ楯となるだろう。

仲間がいる。

その事実だけで私は少し前に進める気がした。

こうして人里の夜は更けていった。

東方偽人録設定資料あれこれ　part1

オリジナルの異変、オリジナルのキャラクター、オリジナルの妖怪…いろいろと説明しなければならないというのに本編での説明が不十分だったのでここでちょっと説明をします。

『偽人』

本作品においての主人公『神田　颯』がこの妖怪に当てはまります。容姿は通常の状態では人間とほとんど変わりありません。本編においても二人のボディーガードを見てびびっていたのはこれが理由です。

しかし魔力やら妖力やらを抑えることに長けており、妖怪と判断することがかなり難しいです。

偽人の遺伝子構造は特殊で別生物の遺伝子を舌で感知することでその生物の特性をコピーできます。ですが食事とかでは遺伝子は感知できません、基本は血液等体液で感知します。

既に八雲家で何個かのサンプルをもらっています。

ならば紫や鬼などの極端に強い遺伝子を入れればよくね？っと思いますが、あまりに強大な遺伝子を受けとると体が拒絶反応を起こし、最悪死にます。

ストックしておけますが、最大五種類で古い物から順に消えていきます。

主人公が無理をするかどうかは今後の話によって決まります。

主人公の明日はどっちだろうか。

『人里』

幻想郷にはいくつかの人里があり、今回の舞台はその中の一つで近くには迷いの竹林があります。

人里の規模は大きく、片岡によって管理されています。

施設としては、慧音のいる寺子屋や、大体の物が揃う大きな商店街、病院、銭湯等色々充実しており、地下には発電所があります。銭湯のお湯は発電所の排熱を利用しており、技術力の高さがわかります。人口も多く、人里の面積は外側の田畑も合わせれば相当な広さになります。因みに迷いの竹林に行くための道もありましたが片岡の計画により封鎖されました。

『片岡』

謎多き里長です。

その素性は側近でさえもわかりません。

能力保持をしていることはわかっているものの詳細は謎です。

閻魔の前での審判も全て掻い潜り、里の住民の信頼も０から３日で再度里長の座に収まりましたが実力なのか、能力なのか、これもまた謎に包まれています。

因みに片岡は本名ではありません。彼がそう名乗る理由は地下発電所の発電機一号機の名前が片岡だったからであり、彼は相当気に入ったらしいのですが、彼の周りの人間は彼のそれが理解できなかったと語っています。

因みに発電機一号機の名前が何故片岡になったのかは発電所のスタッフ曰く「人の名前に近い方が愛着がわくから」とよく意味のわからない理由らしいです。きっと酒に酔った勢いとかその場のノリかと思われます。

『神田　颯』

本作品の主人公であり、作品全体は基本的に彼の一人称視点で語られています。年齢１８歳

身長１７３ｃｍ

体重５２ｋｇ

どうかはわかりませんがまぁまぁ平均的かなという感じで設定してますが少し低いかもしれません。

種族『偽人』

能力『あらゆる種族の特性を真似る程度の能力』
オリジナル妖怪の偽人です。
そして能力も偽人の設定通りです。詳しくは『偽人』の項目をご覧ください。

プロローグでカットした八雲家での生活

颯は本編に入るまで八雲家と修行場（隙間）を行き来していただけなので幻想郷内については資料などで下調べしています。

小3から小6ぐらいの年は一般教養を藍から教わっていました。ルールだとか、敬語だとか、道徳等を学びました。彼は一般常識は持ち合わせています。
因みに小5の辺りで橙が式として登場します。

中1から中3ぐらいの年は能力活用のための血液サンプル摂取と戦闘訓練をしていました。
血液サンプルは五種類で、紫が頼んでまわって採取した物です。

その後は出発までに能力の使役方法の研究をし、幻想郷で生きていく為の準備をしていました。

一連の流れはこういった状態ですが、これをやりはじめたら本編に辿り着くのに結構時間がかかるのでカットさせていただきました。
今のところ公開できる設定は以上です。ここまで見てくださりありがとうございました。

第二話『偽人の聞いた銃声』

夜は危険だから泊まっていけと慧音に言われたが流石に家に帰らなければいけないと思った私は寺子屋をあとにした。

季節は冬、夜はかなり寒い。

家に帰ったらとりあえず温かい飲み物が欲しいところだ。

寒いので早く帰りたかった私は商店街を通らず最短であろう路地を通って帰ることにした。自然と足取りは速くなる。

そして雪が降り始め次第に辺りが白くなっていく。吐く息も白く、寒さに耳は痛くなっていく。

路地に入ってしばらく歩くと私は異変に気付いた、誰かが後ろからつけてきているのだ。

私が歩く速さを少し上げるとその誰かも同様に速さを上げた。

この状況的に相手は少なくとも路地を全て把握している、しかし私は今日この町に来たばかりで路地は地図を覚えただけで実際の風景は知らない。

寒いから早く帰りたいという思いだけで路地に入ったのは失敗だった。

しかし接近してくる気配はなく数分後にはついてくる足音は消えていおり、その後人には殆ど遭遇せず自宅前へ辿り着いた。時間は２０時を過ぎていた。

自宅の鍵を取りだし鍵を開けて中に入ろうとしたその時、金属バットで殴られたような重く鈍い音と共に背中に鈍痛が走った。

そうとう強い力で殴られた私は扉に頭をうちつけ額を少し切った。滴る血が雪を綺麗な赤色に染める。

薄れ行く意識の中犯人の姿を見た私はその顔と体格から昼間片岡と一緒にいたボディーガードの一人だと判断した。そいつは何かを言っていた様に見えたが私には何も聞こえなかった。そして積った雪の上に倒れたとき、私は完全に意識を失った。

そして翌朝の午前7時。

「あいつ、寺子屋に財布なんて忘れてどう生活するつもりなんだろうか、全く。」

そうぶつくさ言いながらも、昨日財布を忘れた私に財布を届けに来た慧音は扉を叩いても私が反応を示さないことを不思議に思い、扉を開けようとした。すると鍵がかかっていないことに気づいた。

「中から返事が無い上に鍵がかかっていない？寝ているにしても防犯の心得はないのか？説教するか…うん？これは。」

玄関前の扉に少量の血液が付着しているのに気が付いた慧音は「入るぞ。」と言って扉を開けて家に入る。やはり誰も居ない。

「もしかしなくてもあの血液は颯のものかもしれないな。だとしたらこれはまずいことになったかもしれない。颯を探さないと、まずは人手が欲しい、妹紅なら大丈夫か。」

慧音はすぐさま寺子屋に戻り、休校の張り紙をし、寺子屋の裏口から回り道をして迷いの竹林へ入っていった。

慧音が颯の自宅から離れた頃、旧地獄へつながる縦穴付近にて。

意識を取り戻した私はす巻きされた状態でボディーガードの男に運ばれていた。「気がつきやがったか。しぶとい奴だ。」

男は二十代半ばだろうか、声は若い。

「昨日お前を怪しいと踏んだ俺の予想は的中したな、商店街をふらふらしていた時点でつけていたんだ。やはり妖怪か、偽人とか言う妖怪は知らんがな。」

つけられていた気づかなかった、しかし声が出せない、口も縛られている。

「やっぱりあそこの寺子屋の教師も妖怪なんじゃないか、手間かけさ

せやがって。今頃はもう一人が寺子屋の襲撃にいってるだろうよ。」
「――！」
これは不味い、このままでは私のせいで慧音までをも巻き込んでしまう。
しかし今は、誰も見ていない。ここ里ではない。
「今からお前を掃き溜めに捨てに行くんだ。喜べ、お前みたいな汚ならしい妖怪がうじゃうじゃ居やがるんだ。」
私を罵るのに夢中なボディーガードは私の変化に気づかない。
徐々に髪の色が白くなり、手足の爪が鋭く、硬くなる。犬歯は鋭くなり、白い尻尾がはえる。
「んあ？なんだお前！」
気付いた時にはもう遅い。
私は縛っていたロープを切り裂き、ボディーガードを蹴り飛ばしその反動を使い距離を離した。
『白狼天狗』、妖怪の山にいる天狗の中でも位の低い天狗だが辺りは一面銀世界、姿は見えにくくなると考え、さらにロープを切断することを考えれば爪が鋭く硬いこれが一番最適である。輝く太陽は雪に反射し、吹く風によって積った雪は舞い上がる。
色は白に近い色の防寒着服を着ていた私の体は見えにくくなる。
「お前、正体現しやがったな！」
相手はリボルバーを取り出す、六連式の様だ。
保護色があるとはいえ、危険なのにかわりはない。
とにかく逃げることだけを考えることにした。
敵は拳銃を所持しているが射つのには慣れていない上にかなり視界が悪い。とりあえず足跡と臭いを頼りに里の方向を確認する。その先には敵がいた。敵の方に丸腰で突っ込むほど私もバカではない

ので様子を見ることにした。

その瞬間、一発目の銃声。

銃弾は頬を掠めた。

続けて二回目の銃声。

これは弾が見当違いの方向へ飛んでいった。

「へへっ、相手は丸腰の白狼天狗だ恐れる必要はない、俺は銃火器を持ってるしな！」

一発目がかすったせいで私自身焦っている、背中には汗が流れ、心拍数が上がる。とまれと言い聞かせても体が震える、恐怖に視点が定まらない。

当たれば命はない。

恐れてる、死ぬのが怖い、こわい、コワイ。

三回目の銃声、銃弾は私の足元に穴を開けた。

あと数ｃｍ前に足があれば歩けなくなっていたかもしれない。更なる恐怖に足ががたつく。

しかしここで奴の言葉が頭をよぎった。この先には掃き溜めという縦穴があるらしい、今までもそこに人を落としていたからここに来たと考えれば相当深い穴だとわかる。

この状況を打破するには一か八かの賭けにでる他ない、その穴使い、逆に敵を落とすのだ。そう思った私は振り返り穴の方向に走りはじめた、白狼天狗である私は今足が速い。「逃がすか！」

その怒声をかき消すように四回目の銃声が鳴り響く。

銃弾は真横を通り抜ける。

私はこの時着ていた防寒着のフードを深く被った、そして私は白狼天狗から徐々に姿を変える。

二本の手足の他に四本の蜘蛛の足がはえ、目のまわりには小さな複

眼ができる。
背を向けて走っている私の変化に奴は気づいていない。
運が良いことにおそらく替えの弾が無いのだろうリロードをしない、よって確実に殺すために弾を温存しているのだ、走りながらでは狙いも定まらない。

そして穴の前まで来て立ち止まった。「ようやく止まったと思えばここか、お前も運が無い。ここがお前の墓場だ、墓穴ぐらい見ておけ。」
「そうだな、お前みたいなでかい奴でも十分入れる大きさだな、この筋肉バカ。筋肉バカの割にはちまちま銃なんて使うんだな、笑えるよ。」
「なんだと?」
挑発に乗ったのを見た私は振り返ると同時に糸を出し、敵を拘束した。『土蜘蛛』、地底にいる蜘蛛の妖怪。糸は硬く、色々な用途に使え、複眼は大勢の敵を一気に目視できる。
しかし寒さに弱い虫型の妖怪。短期決戦にしなければ力が弱くなっていく。
「なんだこれは!」
体格が良いだけに腕に堪える
「逆にす巻きにされる気分はどうだい?今からお前をここに落とす!」
糸を引っ張る。
「くそ!お前、離せ!」
抵抗を続ける。
私は寒さに力が弱くなっていく。

しかし相手は私の思いもよらぬ行動に出た、と言うよりは安易に予想はできるが緊張と焦りで大事なことを忘れていたのだ。
「離せっていってるだろうが!」
突っ込んで来たのだ、真正面から。
このままだと二人一緒に落ちることになる、そう思った時には敵の

タックルを受けていた。そして私達は穴の中に落ちていった。

拘束が緩んだ敵は真っ逆さまに落ちながらも私にリボルバーを向ける。

「こいつで終わりだ！」五回目の銃声。

銃弾は私の左肩を貫通した。

痛みに悶える私を見た奴は味をしめたらしくもう一度トリガーに指をかけた。

死んだ、そう思い目を閉じた瞬間、敵の手元からリボルバーが消えた。

私も敵も状況が理解できなくなったが私はこれ以上のチャンスは無いと考え、もう一度敵を縛り上げる。その時耳元で「頑張ってね、お兄さん。」そんな声が聞こえた。振り返るが無限に暗闇が広がるだけだった。

おかしいと思いながらも敵を見る、まだ納得していない様だ。不揃いな岩がゴロゴロした壁面に敵を叩きつけ、顔面を足で蹴りつけ、壁に擦り付けたまま落ちる。

気を失わせ、糸を外す。敵を仰向けにし、フリーになったその顎に落下する速度を足して回転しながら蹴りを放つ。

落下速度に勢いが加わり真っ逆さまに落ちていく敵を見送った。

糸を出し止まろうとした瞬間、別の糸に引っ掛かり私の体は落下から解放された。

「あれ？おかしいな、同族が掛かってる。って怪我してるじゃない！大丈夫？」

声がして、奥から現れたその少女は驚いた表情で私を見ていたのだった。

一方敵の落下地点は池があり、敵は意識を取り戻し池から上がっ

た。
「くそ、あの野郎。次に会ったら必ず仕留めてやる。」
「次があれば、だけどね。」
その声の主は少女だった。黒い帽子を被り、眼はうぐいす色で何やら眼球のようなアクセサリーを身に付けていたがその眼は閉じたまま動かない。
驚くことにその少女は残り弾丸が一発分入ったリボルバーを持っているのだ。
「なっ、このっ、それは玩具じゃない、返せくそガキ！」
「人に頼む態度じゃないし、返す気も更々ないよ。あなただったのね、地上から人を落としてたのは。お姉ちゃんが困ってたわ。お燐は喜んでたけどね。」

リボルバーを構える。
「お姉ちゃんを困らせる奴は絶対許さないし、一通り見てたけどあなたかなり極悪人だね。あなたに生きてる資格はないよ、本来この池はあなたが落とした人を助ける為のお姉ちゃんの処置。ヤマメも糸を張ってくれた。」
奥から人が姿をあらわし始める。その人達は皆人里から出された人間達だった。
「お前のせいで、お前らのせいでこうなったんだ。」「どうしてくれるんだ、息子を一人置いてきたんだ。心配で仕方ない。」「人間のクズめ、地底の妖怪は皆優しい。」「死んでしまえ！お前らこそ、片岡こそが汚れだ！」
一斉に殴りかかる、颯との戦闘で全身傷だらけのそれが動かなくなるまで殴り続ける。
「こいし様、その黒い物をお貸し下さい、私がとどめをさします。」
こいしと呼ばれた少女はその一人にリボルバーを渡し、「後はよろしく。」と言って消えた。

六回目の銃声は穴全体に鳴り響く。

頭蓋骨が砕け、脳が飛び散る音と共に。

一方上層、蜘蛛の巣では。

「そうだったんだ。大変だね、地上の人里も。」

「すまない、拾ってもらった上に怪我の治療までしてもらって。」

「いいんだよ、私が好きでやってるんだし。」

笑いながら話す彼女はどこか会話することに喜びを感じているようだった。緊張したように声が震えている。

「もしかして会話するのは久しぶりなのか？」

「そういうわけじゃないんだけどあなた物凄く人間に似てるから人間と話してるみたいで嬉しくて。」

恥ずかしそうに笑う。

「なるほど、そういえば名前を聞いてなかった、名前を教えてくれないか？」

「私？私は黒谷　ヤマメ、見ての通り土蜘蛛よ。」

「俺は神田　颯、偽人だ。よろしく、えっとヤマメでいいかな。」

「いいよ、よろしく。偽人って珍しいね、地底にも数人居たけどもう居ないよ。皆突然どっか行っちゃったんだ。」

突然何処かへいってしまった、その言葉に引っ掛かりながらも私は何も言わなかった。

「わっ！」

突然目の前に少女が現れる、さっきの声の主だ。

「うわっ！」

「ちょっと、動かないでよ。」

ヤマメに怒られてしまったが私は悪くない気がする。

「えっと君はさっきの。」

「こいしだよ、お兄さん、初めまして。面と向かって話すのははじめてだもんね。ずっと見てたよ、昨晩ストーキングされてたあたりから。」

こいしは笑顔で話す。

「それにしてもお兄さんすごいね！銃持った相手に丸腰で挑むなんて、無謀にもほどがあるよ。」

しかしそんなことより気になった疑問を私はぶつけた。

「そんなことより君がやったのか？ついさっきの銃声。」

「違うよ、あの人に恨みを持った人達がぼこぼこに殴ったあと私が取り上げた銃を使って殺ったんだ。」

恨みを持った人達とは誰か気になったが私はあえて聞かなかった。

その話が終わったとほぼ同時に治療が終わった。

「弾が貫通していたのと妖怪であったのが幸をそうしたね、傷は殆ど塞がってたよ。」

「ありがとう、ヤマメ。助かったよ。」

「治療が終わったならちょっといいかなお兄さん、私の家に来てほしいんだ、いい？」

「別にいいけどどこにあるんだ？」

「旧地獄にある地霊殿ってとこだよ。」

そういってこいしは私の手を引いた。ヤマメに別れを告げ、私は引かれるままに地霊殿という場所へとむかっていった。

第三話『偽人の嗅いだ紅茶の香り』

こいしを呼ぶ声が聞こえ、こいしが振り返ると私も振り返った。その声には聞き覚えがあったがその声の主が私達の目の前に来た時、驚いた。

「こいし様、死体の処理は終了しました。」

その声の主はさっき死んだはずの片岡のボディガードにそっくりなのだ、身長も体格も声も何もかもがだ。

しかし雰囲気も口調も違うし、溢れ出る殺気もない、更には妖怪であろうこいしとしゃべっているし敬語だ。

双子だったのだろうか、そんな疑問が溢れてくる。

「そんな堅苦しい呼び方はやめてって言ったでしょ？こいしでいいって。それにしてもクローンとはいえ自分と全く同じ姿形の死体を処理するのは苦しかったよね？」クローン、その言葉に引っ掛かった私の表情も気にせず二人は話を続ける。

「はい、ですが他の方々が顔は見えないよう処置してくださいました。ありがたい限りです。」

「クローンとは一体どういうことなんだ？こいし。」

「彼らの居た人里の長が円滑に政治を進める為に自分の教えやモットーを刷り込んだクローンと里の人間をすり替えているんだって。それで元居た人間とクローンを入れ換えるために地底へ続く横穴に突き落として殺してきたんだって、ひどい話だよね。

私には難しい話はわからないけど自分の欲のために殺すのは悪いことだよね。」

「その話、詳しく聞かせてくれ！」

それは情報が少なかった私にはかなり有益な情報だった、もしかしたら紫に報告する間もなく片岡を潰せるかもしれない。

「いいよ、というよりその為にあなたを連れてきたの。お姉ちゃんが話して欲しいんだって。」

「何でこいしのお姉さんが俺の事を？」

「会えばわかるよ。」

彼女の言うお姉ちゃんについては道中聞いた話によれば他人の心が読める覚妖怪らしい。

覚妖怪を紫は嫌っていたが本当に心が読めるのだろうか、私は正直会ってみたいと思っていた。しかしこいしは妹といっているのに心を読まない。正直なところ半信半疑だ。

しかしその実力は聞く限り相当なものだ。彼女は地底、旧地獄においても強力な発言権を持ち、強力な核の力をもった地底に人工太陽を作った妖怪をペットとして使役し、財力も知力も高いらしい。

財力に関しては目の前にある地霊殿を見る限りかなりの物というのは納得だ。かなり大きく、美しい外観である。美しいのは外観だけではない内装は光の入り具合を計算して作られたであろう神々しいステンドグラスが入り口にあり、赤いカーペットが敷かれてある。館内は隅々まで綺麗に掃除されており、部屋数も多い。

所々に置かれた花瓶に刺さる薔薇は色鮮やかである。

しかし不自然だ、館内では動物しか見ないのだ。たまにハシビロコウのような珍獣までいるのに使用人はいっさいいないのだ。そして広い館内を歩くこと数分でこいしが立ち止まった。

「ここだよ、お姉ちゃん今忙しいからずっと書斎に籠りっきりなんだ。入るよ、お姉ちゃん。」

どんな妖怪なのだろうか、やはり紫の様にかなりのカリスマ性を持った方なのだろうか。それとも知性溢れるインテリ系の方なのだろうか。扉を開けて中に入ると書斎の山にから赤い目玉が出てきた。

「こいし?それとお客様かしら。」

「お姉ちゃんが呼んでた人だよ、連れてきたの。」

「あらそう、ありがとうこいし。」

椅子から立ち上がり、目の前に出てきた彼女の姿はピンク色の綺麗な髪にこいしの服とは正反対の色合いの似たような服。そして何より小さい。

「小さいとは失礼な方ですね。私が地霊殿の主、古明地さとりです。知ってるみたいですがあなた半信半疑のようですね、私はちゃんと心が読めますよ?」

このような形で彼女の能力を確認することになるとは思いもしなかった私は思わず苦笑いをしてしまった。

「この書類まみれの汚い部屋を見せるのは恥ずかしいですし、客間に行きましょう、美味しい紅茶ぐらいは出しますよ。」

そういうと彼女は部屋を出て客間に案内してくれた。

客間は豪華で暖炉があり椅子も高そうな物だ、絨毯も踏んでいるという実感を感じるくらいだ。正直感動した。

「ふふっ、感動して頂けるとは嬉しいです。」

そう彼女は微笑むと腰をかける様に言い、私はふかふかの椅子に腰

をかけた。
間もなくして紅茶が出てきた、運んできたのは猫耳を着けているわけでは無いなら化け猫だろうか。部屋には紅茶の香りが広がっている。紅茶を淹れるのは慣れている様で、慣れた手付きで紅茶を出した。茶葉はアールグレイだろうか、香りがとても良い。
「ありがとう、お燐。
因みに正解です、うちのはアールグレイで、風見　幽香って花の妖怪が作っているやつです。
アールグレイのような香りの立つ物はストレートですよね、ミルクを入れてもにしても香りがあまり飛ばないのでミルクティも美味しいです。まぁ、あなたは今それ以上に気になってる事があるみたいですが。
私には八雲　紫が何をしたいのかわかりませんが、上で戦争でもあったのかって言うくらい穴に人が落ちてきてこちらも困っていた所でした。」

紅茶を飲みながら彼女は話を続ける。

「あなたの心を読む限り、上の人里で片岡っていう独裁者が自分の私利私欲のために人をクローンと入れ換えている様ですね。何故クローンを作る技術があるのかはこいしが調べてきてくれました。こちらのわかる範囲で説明しましょう。」
「何でそんなにしてくれるんですか？」
「地底を馬鹿にされた上に掃き溜め何て言われたら流石の私も怒りますよ。」

窓から眺めた地底の街は本当の太陽の光がなくとも輝いていた。
「ここにはどんな生き物よりも遥かに純粋な者達がいるのです、しかし本当の太陽の光が浴びたいのに浴びれない。話には聞いてるみた

いだけど私のペットの一匹が人工太陽を作りました、その時はじめて浴びる赤外線や紫外線に戸惑う妖怪もいましたが、でも皆、涙を流して喜んだのですよ、その温もりに。」

ヤマメもそうだった、地底の妖怪はその能力等の事情により迫害を受けた言わば被害者達だ。彼女達は努力をしている、地上に夢を抱いている。あと少し、あと少しの所なのだ、地上に出られるのだ。それには本来の幻想郷を取り戻す必要がある、それができるのは私だけかもしれない。

「私達も協力します、あなたの思い、私には感じ取れました。こいしから聞いてあなたにかけてよかったかもしれません。」

「お姉ちゃん、私も協力するよ。」

突然こいしが現れた。能力なのだろうか。

「私だって地霊殿が一番大変な時にいなかったから、お姉ちゃんの役に立ちたいの。いつもしてるのって地底と地上の友好関係を円滑にするための仕事なんでしょ？私は役に立てる。この能力があれば、きっと！」

「こいし、あなたはもう十分働いたわ。休みなさい、あなたに居なくなられるのが一番寂しいのよ。」

こいしはそれを聞いた瞬間、何か焦っていた表情は緩み、笑顔に変わり。

「わかったよお姉ちゃん。」

と言って客間を後にした。

「本題に入ります、私はあなたにかけたい。地上における地底の評価が変わり始めた今、最後の壁は片岡という独裁者です。あなたがここに来て、分かってくれると信じて頼みます。どうか、お願いします。私達と戦ってください。」

さとりは頭を深く下げた。

「顔を上げてください、元々俺も片岡を探るために人里に入ったんです。ですが今、その目標は片岡の打倒に変えます。心の見えるあなたになら答えはもう見えているはずです。」

「ありがとうございます。」

その後私達は作戦を立て始めた。

「こいしには地上に出てもらい彼女の能力『無意識を操る程度の能力』を使い、敵の動きや発電所内部の構造等を下調べし情報を集めてもらいました。

こいしの情報によれば人里の地下には発電所があり、その中にクローンの研究施設があるそうです。『A―13』と書いてある棟の中に扉がありそこからクローンの研究施設になっているそうです、キーロックナンバーは…」

さとりの説明はしばらく続いた。

ちょうど颯が拐われてから数分後の迷いの竹林入り口では慧音がとある家を訪ねていた。

「妹紅、いるか?」

妹紅と呼ばれた少女は身長が高く、髪色は白い、ボーイッシュな格

好をしていた。
「慧音、どうしたんだ？」
「不味い事になった、お前の力が欲しい。」
「もしや片岡の野郎か？」
片岡の話は伝わっているらしく、妹紅の表情に怒りの色が見え始める。
「そうだ、奴はついに人に手を出し始めた。昨日来たばかりの偽人が姿を消した。どこにいったかは分からないが里中探しても見つからない。そうしたら寺子屋の前に片岡のボディーガードが居てな。昨日その偽人と話した会話の内容を聞かれたのかも知れん。とにかくその偽人を探すのを手伝ってくれ、頼む。」
「おう、分かった。その偽人の名前と容姿は？」
「神田　颯だ、現代から来たらしくあまり見ない格好をしているから分かりやすいはずだが白い防寒着を着ている、まだ時間はたっていないはずだ、急いで探すぞ。妹紅は里の外を頼む、私はもう一度里に戻ろう。」
二人は一斉に走り始めた。
所変わって地底ではさとりが説明を終え、流れが掴めた颯は地上へと上がって行くため地霊殿を後にした。
地底の繁華街のようだが飲み屋ばかりだ。見てみると鬼が昼間から酒を飲んでいた。
酒の飲めない私は足早に繁華街を抜け、落ちてきた場所に戻ってきた。

土蜘蛛の能力を使い糸を伸ばしては引き、伸ばしては引きを繰り返し登っていく。

「おっ、颯じゃないか、もう上がるのかい？」

途中の蜘蛛の巣にはまだヤマメが居た。

「うん、これから上がって一仕事したらもう一度来るかもな。それにしても大変だな。」

「いつ落ちてくるかわからないもの、気が抜けないね。」

受け止めるため蜘蛛の巣に妖力処理を施しているのだ、彼女が気を抜けば落ちてきた人間を受け止めるどころではなくなってしまうのだ。

「あと数日でその仕事も終わりになるだろうから安心しときなよ、次は安全に人を上げたり下ろしたりできるものでも作ったらどうだい？」

「桶とか？」

「釣瓶落としみたいだな。人がはいれる丈夫なやつ、頼んだら作って貰えるんじゃないか？」

「ははは、面白いこと言うね。それは楽しそうだ。」

この数日間談笑なんてしてなかった私は久々に笑った。

地底は掃き溜めなんかじゃない、ほとんどの幻想郷の民がそれを理解してくれるはずだ。

ヤマメに別れを告げた私は登っていく。
地上に出て背伸びをしながら里の方に歩き出して数歩の地点で後ろから声がした。
「待って。」
私が振り返るとそこにはこいしがいた。
「お姉ちゃんはあんなこと言っていたけどやっぱり任せっきりは嫌だし不安だから私もついていく。」
「そんなこと言われても。」
「あの様子だとナビゲートしないとあなた迷いそうだもの。」
「うっ。」
図星だった、正直言うと自信がない。
「ほらね、私は肉弾戦は苦手だけど弾幕ならすごい自信あるし。」
「弾幕ごっことは違う、相手は皆銃火器を持ってる。」
「あなた終始逃げ腰だったじゃない。」
「うぐっ。」
痛い所をつかれる。そうだ、銃火器相手に今度はそううまく行かないに決まっている。
「ヤマメの前であんなこと言っちゃって。次落ちてくるのがあなたの

死体って言うのは嫌だし。」

次々えぐってくる、しかもその傷口には必ず塩を直に当ててくる。

「私の重要性分かってくれた？」

「はい、身に染みて分かりました。」

「よろしい。行くよ、颯。」

「はいはい。」

これから私は大丈夫なのだろうか。

一方地霊殿のさとりの自室。

そこの窓に向かって置かれた大きな椅子に座ってさとりは紅茶を飲んでいた。自分で淹れたようだ。すると一匹の黒猫がさとりの膝の上で日向ぼっこを始めた。

「こいしは行ってしまったのね、まぁこいしなら無事に帰ってくるでしょうし、帰る場所はいつでもあるのだから長く待ちましょう。」

紅茶を飲みながら猫と喋っているようだ。

「うん？あの男が弱そうだって？そうね、今の彼は紛れもなく弱いわ。頭は多少良いみたいだけど偽人自体がそこまで戦闘特化した妖怪じゃないもの。」

猫がさとりの膝の上で鳴き声をあげる。

「ふふっ、意味はあるわ。だって私の予想は当たっていた、彼の能力の

ストックには…あら、お腹すいた？ちょっと待っててね、すぐに作るから。」

そう言うと猫を椅子の上に置き、キッチンへと向かって行った。

「目がほんとそっくりなのよね、優しかった。優しかったのよ、彼女は。なのに何で、何でよりによって彼女が。」

その目には涙か溜まっていた。

心配した動物達がさとりにすりよる。

「大丈夫よ、大丈夫。昔を少し思い出しただけだから。」

番外編『こいしの過去と甘い菓子』

時刻は日がくれた１８時。

私、古明地　こいしはお姉ちゃんの夢である地底と地上の友好関係を築くため、神田　颯という妖怪と共に最後の難題、独裁された人里の解放に向け歩いていた。

目的地である人里は思ったより離れており、その道中にある別の人里に入った私達はそこにあった幻想郷唯一といっても過言ではない洋菓子店を見つけた。

「バレンタインデー…ってなんだ？」

バレンタインデーの看板を見た颯に聞かれ、私は一瞬固まった。

「えっ？本気で言ってるの？」

私は思わず疑問を投げ掛ける。

「嘘を言ってどうするんだ、何かの食べ物か？」この様子だと本当に知らない様だが私も実際にバレンタインデーというイベントをやったことがないのでわからない。

本によれば男と言うものは二月十四日に命をかけるものだと書いてあったが地底はそんなイベントは名ばかりで誰もしようとはしなかったのだ。

「なるほど、『二月十四日は好きな人にチョコレートをあげる日』って明日じゃないか？」

好きな異性に、では無いのか。それとも本に書いてあったことは嘘であって、実はただただ自分の好きな人にお菓子を配る日なのだろうか。

ｌｉｋｅなのかｌｏｖｅなのか、そこの違いが私にはわからない。そこで私は彼に提案した。

「ちょっとよってみようよ、このまま今日はこの里で泊まるでしょう？」

甘い物に興味があったからであるが的を射た発言ではあるはずだ。

「そうだな…甘い匂いがすごいしてるし、俺もかなり気になるし、チョコってお菓子を食べてみたいしな。」

計画通り、などと思いながら私はそっと無意識の状態に入った。

ここまで住人に会っていなかったし見当たらないので姿を現していたが、店に入れば私が地底の妖怪とばれるかも知れないからだ。

お姉ちゃんが努力しているとはいえ地底は怖い妖怪の巣窟に思っているのが大半の人間の考えだ。

彼は私が見えなくなったのに気付き洋菓子店へ入ったっていった、一応私は隣にいる。

扉を開け、入ったところで従業員はいなかった。

店内は小さいが暖かく、お洒落な木造の建物で甘い香りがただよっている。

「あれ？誰もいないな。」

しかし奥からは何やら作業をしているような音が聞こえる、一人しかいないらしい、店主のようだ。

「すいません、買い物したいんですが。」

そう彼が呼ぶとやたら甲高い声で「はい、只今。」という言葉が聞こえた。そして現れたその店主を見て私達は衝撃を受けた。
それは甲高い声の似合わない長身で筋肉質な男だったのだ、しかしそれは化粧をしている、どうやら女性の心を持った男性のようだ。
「ようこそ洋菓子店『ｈａｐｐｉｎｅｓｓ』へ、あなたに幸せが訪れることを願いますわ。」
店主らしき人物はウィンクをしながらそんなことを言ったが隣にいる彼は登場時のギャップが凄すぎて話が耳に入っていないようだった。
そうするとカウンターから身を乗りだし私に向かってこう言った。
「あら可愛いお客様、隣の彼にバレンタインのチョコを買ってあげるのかしら？」
「…え？あっ、えぇっと。」
「違かったかしら？」
私はごもってしまった。
別にオカマが怖いのではない、私は他人の性別と心が違っていてもいいと思うタイプだからだ。
しかし能力を使っていたはずの私が無意識の内に能力を解除していたので店主に普通に話し掛けられたのだ。
しかし能力の操作を切ってしまった理由はすぐにわかった。私は見とれていたのだ、ショーケースに並べられていた可愛らしいケーキや綺麗なゼリーに。
「…そういえばあなた古明地　さとりにそっくりね、っていうことはあなたがこいしちゃん？」

「はい…そうですが。」

何故知っている？

「やっぱり！あなたのお姉ちゃんには結構お世話になっているからね、あなたのことも知ってるわ。自慢の妹って言われて一度会って見たかったのよ。」

納得した。しかし名前が出てきたのか突然すぎて私の心拍数がどんどん上がる。

「名前を言ってなかったわ、私はこの店の店主の播磨よ。地底出身の鬼でこのコック帽子を外せば角はちゃんとあるわ。」

そう言うと店主はケースからトリュフチョコを一つ爪楊枝で刺すと「お一つどうぞ。」と言って私にくれた。

呆気にとられて動けなかった私も差し出されたその菓子を受け取り食べる。

「……美味しい！」

さっきまでの緊張状態から一気に解放されるくらいのとろけるような甘さ、さらに固形物だというのに口に入れた瞬間雪のように溶けた、まさに絶品だ。

「食と言うものは人に幸福感を与える、更にお菓子ってものは目で見た目の可愛らしさを楽しむもよし、甘い味を楽しむもよし。

お菓子作りはまさに芸術！

そうだこいしちゃん、あなたもお菓子作りしてみないかしら？」

すぐに返事をしたかったが生憎忙しいと言って断ろうとした瞬間。隣で私達の会話を聞いていた彼が

「やっていけばいいんじゃないかな。お前のことだろうし、さとりにでもチョコを作ってやればいいじゃないか。いずれにせよ最低一泊はこの里で過ごすんだ。楽しめるなら楽しんでいけばいい。」

「あらあなたわかってるじゃない、お菓子は作るところが楽しいのよ。さとりも私のお菓子食べてくれたわ。」

颯がまさかそんなことを言うとは予想していなかった私はお言葉に甘えてお菓子作りをすることにした。

すると播磨はにっこりとした顔で私にエプロンを貸してくれた。

「そうと決まれば早速始めるわよ！善は急げ、思い立ったが吉日よ！」

「頑張って来いよこいし、ありゃ腕が良いプロに違いない。宿は俺が確保しておくから心おきなくってやってこいよ。」

こうしてオカマと私のお菓子作りが始まったのだった。

厨房は地霊殿のものより小さいが設備は良いものが揃っている。

「あなたのお姉ちゃんが私のお菓子が美味しかったって言ってくれてその後に私の為に妖怪でも働けるような人里を探してくれて自分のお店を持てたのよ。本当に嬉しかったわ。」

思えばお姉ちゃんは頑張る人が好きだ。

心が読めるからその人がそれに対してどれだけ全力かも分かってしまう。

私は言うほど頑張る人では無いがお姉ちゃんは昔から私に心から

優しくしてくれた。
私もそんなお姉ちゃんが好きだ。

覚妖怪にとってサードアイは存在意義、それが有るがゆえに忌み嫌われてきた。
お姉ちゃんはそれをどうにかできないか考えていた。
私はどうにかしようとはしなかったが能力が嫌いだった、人間の薄汚いその思考は何度見ても吐き気を感じ、嫌悪感しか抱けなくなる。

お姉ちゃんも慣れるまで苦労をした、だから地霊殿には動物が沢山いるのだ。
動物たちのその純粋な思考が私たちを慰め、真の意味での目の保養であったのだ。
しかし私は耐えきれなくなりサードアイを潰し、思考を読み取るための管を自ら千切り、覚としての能力を失った。その結果、心を閉ざした状態となり、『無意識を操る程度の能力』を得ると私は人目につかないよう過ごし、地底から出ていった。

お姉ちゃんは覚妖怪の運命から逃れようとした私を軽蔑しているだろうと思った私は自己嫌悪に陥りながら明るさに引かれ一つの人里に行き着いた。しかし、私のたどり着いたその人里では地底の悪口とお姉ちゃんを掃き溜めの主と嘲笑っているのだった。
許せなくなった私はその人里のことを調べた。
そこでわかったことはその人里は表面上は住民が意見を出し合い作っていく里だ。しかしその裏は本当に汚れた、想像を絶する場所だった。
住民はサンプルを取られたら殺され、里の長の言うことを忠実に聞くクローンを作り上げ、野に放す。いわば巨大な一人芝居を演じているのだ。その癖雰囲気を良くした里には新しい住民が後をたたない。
ある時には他の里と合併し、一夜にしてその里の民を屍に変え、明け方には全てクローンにした。

妖怪を嫌い、地底を掃き溜めと呼
ぶ。お姉ちゃんとは全く逆の人間の中の屑、どちらが妖怪かわから
なくなってくる。
その人里では二週間調べ続け、調査を大体終えた私は地霊殿に帰る
ことにした。

正直怖かった、もしかしたら捨てられるかもしれなかったからだ。
しかしこの事実は伝えなければならない、お姉ちゃんの努力を踏み
にじろうとする存在を、地底を嘲笑っている家畜どもを。

こうして帰った私を見たお姉ちゃんは泣きながら私に平手打ちを
した後、抱きしめてくれた。
私が居なくなってから血眼になって探していたらしい。

『私にはちゃんとした帰る場所がある。』
その真実は私の心を開き、お姉ちゃんに私は地上での出来事を全て
話した。
サードアイを潰した私の心を読むことはできなくともお姉ちゃん
は信じてくれた、そして私にしかできない仕事をくれた、それが偽人
を探すことだった。私は地霊殿を守りたい。
お姉ちゃんを守りたい。
地底の仲間を守りたい。

その一心で幻想郷中を走り、何度も春が過ぎ、ようやく付けた目星
があたり私は神田　颯を見つけた。
何故八雲家にいたのかはわからなかったがお姉ちゃんへの恩返し
ができた実感がわいた瞬間だった。

「そうね、せっかくだからガトーショコラでも作りましょう。」

播磨は慣れた手つきで準備を始める。
しばらく一人で暮らしていたし、お姉ちゃんに教えて貰っていた私は料理は多少できる。
遠い昔に一緒に作ったケーキを思い出す、一回目は焦がしたっけ。
自然と私は笑顔になっていた。

「今のあなた、凄くいい笑顔よ。これは良いものができそうね。次はメレンゲをこうして…」

作業は驚くほど捗った。
作業をしながら話をしていたが播磨の話は面白く、洋菓子屋を営むことになった経緯やお姉ちゃんの話、地上の大酒飲みの幼女の様な姿鬼の話をしてくれた。
こうして時間は経っていった。

神田　颯は私から見たら頼りない男だ。
八雲家にいた時も散々八雲　藍に戦闘訓練で何度もやられていた。
丸腰で銃を持った相手に立ち向かったりと危なっかしい一面もある。
何故彼をお姉ちゃんが頼ろうとしているのかわからない。
確かに偽人なら人里に難なく潜入でき、スムーズに任務をこなせるが、彼でなくとも偽人はいるだろう。
確かに聞いたことないし名前だけで幻想郷でも見たことはない。ミスをしたらすぐにでも私が一人で全てを終わらせる気でいるが、今のところはまだ大丈夫だろう、しかし心配なところもあるどこか抜けているし。
第一お人好し過ぎるのだ。馬鹿みたいに純粋なところがある、まるで地底の妖怪達のような。
中々に責任感も優しさもあるので少しは期待しても良いのだろう

か…。

「ガトーショコラは焼き加減が全てを分けるわ、足りなければべちゃべちゃ、焼き過ぎれば焦げるわ。しっとりとした味わいにするにはちょうど良い温度と焼き加減がポイントなのよ。」

「なるほど…。」

播磨はお菓子作りに全力を注ぎ、妥協は許さない。この人里ではかなり人気のお店らしく常連も少なくないどころか多い。曰く、「私が愛を込めたお菓子はお客様の心と胃袋を掴んで放すことはあり得ない！」らしい

こうして焼き上がったガトーショコラをケーキクーラーで冷やし、粉砂糖を振りかけ完成だ。

ガトーショコラを木箱に入れ、メッセージカードを添えておき、私は播磨にお金を払おうとした。

すると

「あなたのお姉ちゃんへの愛が私を満たしたわ。あなたからお代なんて貰うわけないじゃない。第一作ったのはあなたよ。」

そういって肩をポンと叩くと

「これ、忘れてるわよ?」

と言って包みを一つくれた。

「ガトーショコラを焼いてる時間で作るなんて、本当に手際が良いわね、その仕事が終わったら私の店で働いて欲しいぐらいよ。」

「えっ？」

包みの中にはトリュフチョコが入っていた。

「忘れてるってことは無意識で作ったのね？私が聞いたら颯の分って答えたのに。」

「なっ、嘘でしょ？」

「オカマは嘘はつかないわ。」

「どんな理論よ。」

そう言ったらなんだか可笑しく思え、二人で笑った。

時刻は１９時半。

お姉ちゃんへは届けてくれるらしい。

お礼を言った私は外に出ると颯が迎えに来ていた。

「早かったな。」

「うん、楽しかったよ。それとはい、これ。」

「可愛い包みだな何だこれ。」

「ハッピーバレンタイン、トリュフチョコだよ。」

「…毒入りじゃないのか？」

「さぁ、無意識で作ったし何味がするんだろ、播磨が止めなかったから

多分普通のチョコ。」

「無意識テロとかこれからは気を付けろよ？
でもありがたく受けとるよ、匂いはちゃんと甘い匂いがするし何より美味しそうだ。ありがとう。」

「どういたしまして、感謝しなさいよね。」

降り積もった雪の道を歩く。
全てはお姉ちゃんの夢の為、隣にいる頼りないお人好し妖怪と共に。

「ねぇ、宿はとれたの？」

「ちゃんと二つ部屋とったよ、安心しろよ。」

私はもう二度と逃げたりしない、そむいたりしない、何にでも打ち勝ってみせる。

Ｈａｐｐｙ　Ｖａｌｅｎｔｉｎｅ’ｓ　Ｄａｙ！

第四話『偽人の触れた禁忌』

翌朝６時半、昨日の夜から明け方にかけて降った雪が積もっていて朝日が反射して光っており、朝は布団から出るのを躊躇うぐらいの寒さだ。

ここ最近は雪が多く降っており一面銀世界である。

寒さに震えながら着替え、宿を出る準備をし、その後こいしと合流し朝食をとり宿をあとにした。

外にでると冬特有の日差しの強さが感じられた。

宿泊した宿のある里を抜け、目的地を目指す。

「ところで颯は地底にいた時に寄り道してたみたいだけど何をしてたの？」

「ん？…呼び声を聞いたからちょっと覗いただけだよ。」

「何かいたの？」

「いたよ、いっぱい。」

「ふーん、何かは知らないけど地底でそこまでまわりに積極的に話しかける妖怪は少ないし…何かなぁ。」

「その内教えるよ。」

地底から地上に出る前、縦穴付近で私は呼び止められた。その妖怪は私が偽人であるのを見抜き、話し掛けたのだ。

私には五つの能力の保存スペースがある。最初は『白狼天狗』、『土蜘蛛』、『鎌鼬』、『雪女』、『鴉天狗』の五つを所持していたのだが、その妖怪の頼みから鴉天狗のスペースをそれに変えたのだ。その代わり代償が居る能力を獲得した。
あまり使いたくは無いが使うときは必ず来ると思っている。

目的地まであと少しになったところで森の中に入った。その時、身の毛のよだつ感覚にかられ、私達は立ち止まった。

「なにこれ…殺気？」

こいしはあたりを見渡す。しかし私にはこの殺気の正体がわかってしまった。
目の前に現れたそれはあまりにも見慣れた姿、九本の狐の尾に帽子についた式の札。
私に戦い方を教えてくれたいわば師範の様な存在。

「何故あなたがここにいるんですか？八雲　藍さん。」

八雲　藍。八雲　紫の優秀な式でその実力はかなりのもの。
戦った事もないがこの人には勝てる全く自信がないし、戦いたくもない。が、相手はどうもタダで帰してくれるような雰囲気ではない。

「颯、随分と身勝手な行動してくれたではないか。紫様がお怒りだ、ましてや覚妖怪なんぞと手を組んだ上に自分でこの件を解決しようなどと…身の程をわきまえろ。」

藍の言っていることは正しい、しかし横からこいしが反論する。

「あなた達分かっていたなら何で対策とか立てなかったのよ！お陰様でやりたい放題じゃない、片岡とか言う人間は！」

呆れた顔で藍が答える。

「奴は人間じゃない。」

「ならなんなの？」

「奴は天人だ。」

「天人…？何故あんな差別的行動や徳の下がる様なことばかりやっている奴が仙人の延長である徳の高い天人なの？」

こいしの言っていることには同意だ。奴が天人なんてあり得ない。

「仙人の定義は妖怪に匹敵する能力等を得た人間のことを指し、天人は修行を積んでそこから不老不死になった仙人を指す。まぁ天人になる方法には姑息なやり方もある。天人の家系なら全員天人になるんだ、奴はきっとこのルートを通っている。」

「そういえば異変起こして霊夢達にボコボコにされたっていう天人がいて、そいつは家系から天人になったって話聞いた…なんだっけ名前。」

こいしが思い出したように語った。

この時点で奴が天人であることは現実味を帯びてくる。

「待ってくれ！それじゃあ奴は…」

「あぁ、不老不死だ。」

これはマズイことになった。奴は天人で不老不死、人里を解放するには難易度がぐんと上がる。

「話が脱線したな。何故今すぐに潰さないのかだが、奴が持つ能力が『嘘を信じさせる程度の能力』、つまりは奴の前では誰でも言いくるめられるからだ。しかも奴は口が達者で頭が良い、たとえ矛盾があっても能力のせいで気付けん。そして一番の問題は紫様にある。」

「八雲　紫に問題？」

「今の時期の紫様は……察しろ。」

……冬眠、か。

「理解しました。」

「話がまた脱線した。

いいか颯、貴様は任務を果たすには不適切であると判断した。」

空気が変わる。

殺気が肌に伝わりピリピリとした感覚がする。筋肉は硬直し、心拍数が急激に上昇し自分の背筋が強張っていて汗をかいているのが分かる。

「よって、貴様を今この場でその職からおろす。だが貴様は紫様のことも、八雲の裏も、全て知ってしまった。そうだな…情けとして命までは奪わない、記憶の抹消で許してやる。」

隙を見て逃げ出さなければ、殺されかねない。どう考えても記憶の抹消程度では済まされない。

「指示通り動かない手駒は成らない歩兵も同然、必要の無い存在だ。」

「黙っていればいい気になって、颯だって少しは良いとこあるよ！」

『少し』は余計だ、と思う反面助かった。今はこいしがいる、もしかし

たら逃げられるかもしれない。

「生憎、俺は存在することが嘘をついているみたいなものだから、口でまで嘘はつきたくない。」

今なら『雪女』の能力が最適だ。別に能力を取るだけで私の性別が変わるわけではない。

能力発動と同時に肌の色は白くなり、体温は急激に下がり死んだような温度へと変わる。しかし体温は感じていない故に寒いという感覚は消えていく。吐く息は氷の結晶ができるほど冷たくなり、辺りの気温は下がる。

こいしは姿を消した、無意識の中に入り込んだのだろう。

藍は最初にこの場に現れてから瞬きすらせずに立っている。隙がないのだ、視線もぶれない。

武道、例えば合氣道の有段者も師範級になると構えを必要としない。事実合氣道の場合はガチガチに構えると初動が遅れ、その間が相手に抵抗力を持たせる。

きっと藍はかかっていった私を即座に取り押さえ、首筋に一撃を浴びせて気絶させてから妖術か何かで記憶を奪う気だろう。

考えれば考える程、動かなくなった自分の姿しかイメージできなくなっていった。

しかし開幕の狼煙は意外な位置から上げられた。

表象「弾幕パラノイア」

こいしのスペルカードだ。

こいしが見当たらなくなった時点で無意識の領域に入ったのは分

かったが肝心の彼女はどこにいるのか分からなかった。
彼女は藍の背後におり、空中で弾幕は花開くと藍に向かって扇形に大玉が飛び、藍のまわりには小さな弾幕が取り囲んでいて逃げられない。
「貴様が強いとはいえ一対一が前提でルールによって縛られ、本来は美しさを競う弾幕が…」

手を前に出す、すると弾幕がはじけて四散した。
妖力の塊をぶつけたのだろうか。
「ルールを失えばこうなる。」

そういうと上空を見上げる。
その衝撃はこちらにも来たがこいしは正面から受けたらしい。
姿を現し、地面にゆっくりとおりて来て膝をついた。
それを見た藍は後ろを振り返ると。
「邪魔をするな覚妖怪、これは私とこいつの問題だ。無意識だろうがなんだろうが発射地点から敵の位置の予測など容易い。」

するとこいしはよろめきながら立ち上がり、ニヤリと全てを見透かしたような怪しい笑みを浮かべながら言った。
「いいの？私のこと見てて」

藍がその言葉を聞いた瞬間、平地にも関わらず、雪崩が襲いかかって来たことに気づく。気づくのは当たり前だ、轟音が鳴り響いていたからだ。しかし雪崩程度なら一撃で鎮められる。と言わんばかりにもう一度力を溜め、放つと雪崩はおさまった。
すると私の姿は無く、こいしも目を離した隙に消えていた。白い雪の上に黒いの羽が落ちている。

「これは…鴉の羽？なるほど、鴉天狗の能力で逃げたか。」

そう言いながら去っていく。

足音が遠退き、消えた頃に飛び散った雪の山の下から腕が出てくる。

「鴉天狗は地底においてきましたよっと。大丈夫かこいし、痛かったで済むものじゃないだろ。」

「ボムで威力を抑えたからそんなに痛くないし、手加減してたみたいだったからちょっと大袈裟に演技し過ぎたかもね、まぁ気を引くのも目的だったし。

彼女も言ってたけど弾幕ごっこはスペルカードルールがあるから良いのであって、今の博麗の巫女である博麗霊夢と八雲紫がそれを作らなければ今のような弾幕ごっこなんてない、殺伐とした殺し合いの文化が続き、異変解決という妖怪殺しが続けられてた。

まさに血で血を洗うような戦いがね。」

私が雪を払い落とし終わると、こいしは真面目な顔つきで私に話始めた。

「八雲　藍はそこまで頭に血が上りやすいタイプの妖怪ではないでしょう。攻撃を見るからに大雑把に見せているけど妖力の使い方が繊細過ぎる。あれが本気なら私達はとっくに屍になっているよ。」

思えばそうだ、スペルカードルールは無視しているのにおかしい。

もしや何かを探ってる？いや、探ってるならいきなり攻撃することは…

「って、こいしが攻撃したからこうなったっていう可能性は？」

「ごめん、無意識。」

「お前それ言えば何とかなるって思ってるだろ…」

いずれにせよ不味い、さっきの罠にかかったのも少し怪しい。
探っている、確実に。

「とりあえずここにいても直ぐに見つかるな…。」

「罠張ろうよ、罠。」

「却下。」

「ちぇー…。」

まだ周りに雪が残っている。
偽人の能力により保存した他種族の力は２４時間に一回ずつという、燃費が悪いことこの上ない。

「足なら白狼天狗の方が速いか…。」

現時点での戦闘は圧倒的不利どころか正真正銘の負け試合だ。
こいしはあんなことを言っていても負傷に変わりはない。

そんなことを考えながら私達は周りの気配を探りながら目的地を目指した。

「藍は一人で来てるのか？」

「式が式を従えてるって聞いたけど…化け猫だっけ。」

「あぁ、橙っていうすばしっこいのが一匹…」

「見つけましたよ！」

木の太い枝を蹴りながら接近する影は紛れもない、橙だ。

「来やがった！これから藍が到着するまで殆ど時間はない。」

「何で早く言わなかったの⁉」

「今の流れで説明しようとしたんだよ、噂をすればなんとやらだ。一直線に走り抜けるぞ！」

走り出した瞬間、背後から強烈な光が差す。

「弾幕来るよ！」

「通常のばら蒔き弾…いや、違う、信号か！」

光が強く範囲が広いばら蒔き弾は目立つので信号の役割を果たす。

「あの過保護な保護者が自分の大事な式を一人でよこす訳がないよな…。」

後方から異常な速さで近づく九尾。

「その通りだ、逃がさん。」

追い付かれる。

このままでは死ぬしか道が見えない。しかし死ぬ訳にはいかない、それ以上に死にたくない。

戦うしかない、手負いの仲間を見捨てるという方法を取れば逃げられなくは無い。

―だが、それだけはいけないのだ。

「仕方ない、ちょいと抵抗するかな。」

さとりに頼まれたのだ、仲間を、こいしは無事に帰さなければならない。

失敗したときはそれが私の最期、成功したとしても退くだけで撃退等は考えても無理だ

地底で見つけた妖怪、『がしゃ髑髏』の能力を行使してこの場を逃れるのだ。

がしゃ髑髏…巨大な骸骨で普段は山に姿を隠すが夜な夜な里に降りてきては、生きている人間を殺してまわる。

血液のないがしゃ髑髏の元となる骨を骨粉にして取り込み、記憶していた。

強力な妖怪であるがゆえに戦闘をした場合の身体への負担は白狼天狗や雪女とは比べ物にならない。最悪の場合何も出来ず身体が拒絶して死ぬか、いずれにせよ賭けであるのは確実だ。しかしこれを背負うことに意味がある。

このがしゃ髑髏が現れた場所は地底へ続く縦井戸に落とされた被害者達の怨念が蓄積した物、つまり片岡への恨みの塊であり、必ずはらさなければならない物である。

怨念の詰まった妖気は溢れだし、紫色の霧となって漂う。

「どこでそんな代物を…死ぬ気か？それ相当の代価は自分の身体への障害として残るぞ。」

藍には見透かされている、なんせ偽人の能力の良し悪しを理解しているのだ、当然と言っても過言では無い。

「今はそんなこと考えても仕方がないだろう。」

リスクは最初からあった。片岡と言う名のそれを相手にした時から既に高いリスクがあり、命を投げ捨てる覚悟で来ているのだ。

「同化、開始。」

地面から無数の骨が現れ私を囲む。すべての骨は紫色の怪しい光を発しており、妖力は増し続ける。その骨が私の体に刺さる。

耳には色々な人間の後悔や恨み、妬み、怒りが聴こえ、頭を巡り、血流に乗り、全身を駆け巡る。

目には誰かの記憶が映る、それは誰かの青春の日々であったり、子供の誕生日であったり、家族の団欒の場であったり…、しかし全て一斉に割れ、血にまみれ、崩れていく。やがて周りの音は何も聴こえなくなり、何もみえなくなる。そのうち自分が誰なのか、何処なのか、何をしに来たのかも忘れていく。ただただ恐怖だけがこの身を支配し、無限に続く暗闇へと落ち続ける。

意識も飛びかけた瞬間に自分の身体の数十倍はあるであろう巨大な骸骨の目の前に来た。

『ここにある魂、偽りの人間に背負えるか？』

薄れ行く意識の中、私は口で答える力も残ってはいなかった。しかし、残った力を使い頷く。

『そうか、なら目覚めろ。精々足掻くといい。』

視界にノイズが走る。ノイズが晴れるとそこはさっきの銀世界。

目の前には藍がいる。

「さぁ、貴様の取った行動がどれだけ愚かか…思い知れ。」

地面を蹴り、雪が舞い上がる。
瞬きの間に藍は一気に距離を縮め、右ストレートを腹部に向けて放つ。
私は腕を交差させ、防御の姿勢を取る。
すると地面から巨大な腕の骨が現れ、防ぎきった。
「…予想より硬いか。」
藍はバックステップで距離をおき、弾幕を展開する。
凪ぎ払うような腕の動きをし、弾幕を掻き消す。
土中から現れた腕は段々と外へその全貌を現し始める。
ギシギシと音を立てながら動くそれからは常に黒い霧を纏っており、近づいただけで呪い殺されそうな雰囲気を放っていた。
霧は濃くなり、太陽の光が届かなくなっていく。
「意外に厄介だな。私が知らない間に成長したものだ。」
藍は呼吸を乱す様子もなく、瞬きすらしない。
そう思っている私は今、身体がものすごく軽い。
藍がニヤリと笑う。
「短期決戦に持ち込むしか無さそうだな、面倒になってきた。」
そう言うと再び距離を積める走りを見せた。
「行くぞ、青二才。」

私は反射的に振り突き、連動して動く巨大な骸骨の腕が周りの木々を薙ぎ倒しながら振り切る。
その瞬間に飛び上がった藍は骸骨の右腕に乗り、腕をかけ上がっていく。
私は左手を出し、登る藍を掴もうとするが避けられ、肩まで上がった所で藍は跳躍、骸骨の側頭部、こめかみ付近に強烈な膝蹴りをかます。同化している私にもそのフィードバックが襲いかかってきたが視界が少しぶれたがそこまでの痛みは無い。
「貫った！」

直ぐに持ち直した私は空中でフリーになった隙に藍を掴み、下に叩き落とすがあまり効いていない、受け身が上手すぎるのだ。
私は間髪入れずに右手刀を振り下ろすが回転をかけて起き上がった藍は後ろに飛び、手刀を完全に避けた。

「（やはり速い、攻撃を簡単に避けられてしまう。
同化しているといえども動きにはタイムラグが生じて読まれてしまう。
しかし一撃はこちらの方が重い、さっきの叩き落としたダメージは少なくとも骨の一本は持って行った筈だ。）」

「（肋骨が一本逝かれたか？どのみち一撃は入って分かったが、近づけば近づくほど不利になるな、奴の周りの霧は恐らく神経毒…本格的に短期決戦にしなければ相手がいくら弱くとも負ける。）」

一瞬の静寂の後、再び拳を交えようとしたその時、どこからともなく音が聞こえる、地響きだ。そしてそれの正体は即座に判明した。
遠くの方から雪が勢いよく降りてきている。

「雪崩か!?」

「くそ、こんなときに…私は構わないが橙が危ない！」

「待ってくれ、藍さん！」

呼び止めたが、既に藍は居なかった。

「颯！私達も逃げないと！」

こいしに呼ばれる。

「あ、あぁ、分かった！」

全力で走り、崖の所に洞穴を見つけた。

中は結構深く、弾幕を灯りにしながら避難した。

雪崩は幸い小規模ですぐに収まる。

藍達はもう追いかけて来ては居なかった。

時間は正午過ぎ、太陽は真上にある。

「こいし、俺が戦ってる間何してたんだ？」

「橙って娘とその他大勢の式を相手にしてたよ、何匹かの式は颯達の戦闘の流れ弾？というよりかは流れ拳にやられてたよ。」

「流れ拳ってなんだよ。」

そんな会話をしつつ周りを警戒しながら暫く歩くと里が見えてきた。

その少し手前で呼び止められた。

「おい、そこの二人。」

声から女性と判断したが長い白い髪が目立つ男勝りな見た目の人が話し掛けてきた。

「私はこの里で寺子屋をやってる奴の友達なんだが…あんた、噂の偽人さんか？」

「慧音さんのか？」

「その反応を見る限り間違い無いみたいだな。警戒しないでくれ、私は味方だ。」